

〔倭訓栞前編十五〕つまだつ 佇をよめり、爪立の義なり、

〔新撰字鏡連字〕躑躅猶豫之貌、又不退而慎 躑躅猶豫也、足須留

〔類聚名義抄五〕躑徒何反 跣正 躑音龍、音躑

〔萬葉集九〕詠水江浦島子一首并短歌中

玉篋、小披爾、白雲之、自箱出而常世邊、棚引去者、立走、叫袖振、反側、足受利、四管、頓、情清、失奴略 下

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみ出て、いとくらきにきけり中 やうく、夜も明ゆくにみれば、ゐてこし女もなし、あし

ずりをしてなけどもかひなし、

〔今物語〕承久の頃、住吉へ然るべき人の參らせ玉ひけるに、折ふし神主經國京へ出たりけるが、人

をはしらせて、住の江殿など掃除させよといひやりたりけるに、あまりのきらめきに、年比しるべき人々の書をかかれたるうたども、柱なげし妻戸にありけるを、皆けづり捨てけり、神主くだり

て是を見て、こはいかにせんと、足ずりをして悲しめどもかひなかりけり、

〔類聚名義抄一〕傍徨タチモトホル 仿徨同下音皇 徘徊音徘徊也 徘徊トヤストラフ

〔同一〕徘徊タチモトホル 徊正 徊タチモトホル 〔同五〕寸歩タ、スム

〔伊呂波字類抄太〕倂タチヤストラフ 倂倂 倂倂 倂踏 躑已上

〔書言字考節用集〕倂タチヤストラフ 倂亦勅二音、字彙小步也、韻會、イ左步也、 徘徊舊事紀、又史、 徜徉羊、並、同

〔倭訓栞中編十三〕た、すむ 停又云

倚或はイ子をもよめり、 神代紀に彷徨をよめり、立息の義、ちや反た也、文選に躊躇もよみ、徒

〔日本書紀二〕一書曰略 於是彥火火出見尊不知所求、但有憂吟、乃行至海邊、彷徨嗟嘆、